

## 暴拳の企図(2)

文久三年（一八六三）春、栄一は再び江戸へ出ます。滞在は四ヶ月に及び、この間郷里との間をしばしば往復したようです。

この前後、京都より長七郎が帰り、河野三郎の遺稿を、栄一に託します。栄一は、これを読んで感ぜし、自ら費用を出すことも、頭三の人となりについて「越智通桓小伝」を執筆、『春雷楼遺稿』と題して出版します。

井伊大老に続いて安藤老中が襲われることで、幕府の権威もようやく地に落ち、当時の世相は、攘夷論・尊王論の真つ盛りだったようです。

そのついで、栄一・惇忠・喜作を中心に、海保塾や千葉道場の仲間も加わり、来る十一月十二日の冬至の日を期して、高崎城に討ち

入り、ここで兵備を整えた上で、一気に横浜に下り、外国人を皆殺しにするという恐るべき計画が持ち上がったのでした。

栄一は、藍玉の商売動向からひそかに百五十両ほどを持ち出し、武器や武具を買い整えます。また家族に累が及ぶのを恐れ、「後の月見」といわれる月見のうたげにかこつけて、それとなく父に別れを告げようとしています。惇忠・喜作



▲尾高惇忠生家（下手計地内）2階の座敷で、高崎城乗っ取り・横浜襲撃計画が練られました

も加わり、栄一は国事に奔走したいという志を述べるとともに、自ら勸告を申し出ます。父と子の話し合いは夜明けにまで及び、ついに父の市郎右衛門が折れ、これを許します。こうした計画が進行する一方、栄一と喜作は、江戸で知り合った一橋家の家臣川村恵十郎を介して、同家の重臣平岡四郎の知遇を得ており、同家への仕官を勧められ、ほとんどこれに応ずるような動きを見せています。栄一の談話によれば、一橋家の家臣になった方が、この拳兵計画を進める上で何かと便利だからという理由なのですが、なかなか複雑な事情があったようです。

（文：新井慎一）

### 物語の手引き

『尊王論』『攘夷論』

江戸時代に、天皇を尊ぶ考え方「尊王論」が高まりました。

さらに、幕末になると、外国船が来航し、その圧力が強まると、外国との通商に反対し、外国を撃退して鎖国を通そうとする考え方「攘夷論」が強くなりました。

開国後に社会が混乱すると、外国に対して弱腰な幕府に反感が強まり、尊王論と攘夷論が結び付き、下級武士を中心として尊王攘夷運動が起こりました。

この尊王攘夷運動の中心であった長州藩や薩摩藩が、英仏蘭米四か国艦隊による下関砲撃事件、薩英戦争で外国勢力の実力を見せつけられ、攘夷の不可能を悟ると、開国・倒幕へと転換し、倒幕運動が繰り広げられるようになりました。

※本コーナーの全編を通じて、登場する人物については、歴史上の人物としてその敬称を略します。また、年齢については、当時の通例に従い数え年の表記とします。

# キラリ熱・中・時・間

～重忠太鼓保存会～



福島健一代表

## 重忠公の生涯を太鼓で伝承

毎年、秋の農林公園を会場に、近隣の太鼓団体が集まり、ダイナミックな演奏を披露する「さいたま太鼓まつり」。その開催は、地元川本の重忠太鼓保存会(以下「保存会」)の皆さんとふかや市商工会の協力で行われています。まつりのトリを飾る重忠太鼓は、鎌倉時代の地元の名将・畠山重忠公の勇猛さや、戦の情景を、太鼓の音色で表現し、聴衆を包みます。

保存会の発足は昭和63年4月。重忠公史跡公園にある重忠像の除幕式で、太鼓演奏を披露するため、地元の有志17人が集まりました。翌年には、県とメキシコ州との姉妹提携10周年記念式典に招待され、国境を超えて和太鼓の魅力を伝えました。

これまでに延べ2000人を超えるメンバーが重忠太鼓の演奏に汗を流しました。今は小学1年生から50代までの仲間33人で、週1回の練習を継続しています。23年の間に曲のレパートリーも

増え、現在ではさまざまなイベントから声を掛けられ、年20数回の舞台を踏んでいます。地元小学校での太鼓指導にも力を注いでおり、夏には被災した田野畑村の子どもたちと交流しました。重忠像の除幕式の際、その足元に埋められた「タイムカプセル」には、重忠太鼓の譜面が入れられています。

代表の福島さんは、「それを開ける100年後、その時にも重忠太鼓の音色が響いていてほしい。そのためにも次の世代に伝えていきたい。」と話されました。



▲重忠太鼓が地域の文化として根付くよう、練習に精を出す保存会の皆さん

### ありがとうの手紙



優秀賞  
小学校高学年の部  
学校のみんなへ

上柴東小学校5年 上田陽人さん

ぼくは、足が不自由なので、車いすです。学校での生活は、不安なことたくさんあるけれど、いつも、先生方や友達がやさしく声をかけてくれて、いろいろ助けてくれます。ぼくは、そんなやさしい人たちに囲まれて、楽しく学校に通っています。ぼくは、とても感しゃしています。

みんなと同じように自由な体になりたいと思うこともあるけれど、人のやさしい心をたくさんもらえることを感しゃして、一人ひとりに対するありがとうの心を大切にします。

### 夫婦道のススメ

声に出して  
ありがとう



須長 敏二さん (65歳)  
典子さん (62歳)

血洗島にお住まいの須長さんご夫妻は、結婚38年目。早くにご両親を亡くされた敏二さんは、典子さん家族が持つ温かさひかれました。若いころは、ともに教員として良き相談相手となったお二人。現在も、お互いの得意な分野を率先して行い、助け合っています。

夫婦円満の秘訣は、『ありがとう』を声に出すこと。心で思っているだけでなく、言葉にして伝えることが大切だそうです。